

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：34503

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14334

研究課題名（和文）教職志望の学生を対象としたチーム型授業観察力養成プログラムの開発と試行

研究課題名（英文）Development and Implementation of a Team-Based Teacher Training Program for Classroom Observation Skills

研究代表者

古田 紫帆（FURUTA, Shiho）

大手前大学・国際日本学部・准教授

研究者番号：60469088

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、教員養成課程において実践的指導力を育成するため、観察チームを構成して授業中に観察記録を共に作り、協議する活動を実施し、授業観察力の向上に重きをおいた教育実習事前事後指導のプログラム開発を目指した。その結果、主に次の2点が明らかになった。

1つ目は、メンバーの組み合わせが多様性に富んでいたとしても、言動の記録や解釈の共有を妨げることはないが、指導的立場の関与が、観察技術の向上に必ずしも有効だとは言えないということである。2つ目は、授業がオンラインで実施されたとしても、学習者一人ひとりの思考を可視化すれば、学習状態に注意を払いながら協議を行うことが可能であるということである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教職課程の授業内において教育実習の事前学習の時間を十分確保することは困難であり、授業観察の訓練の優先順位は低くなりやすい。本研究の意義の1つ目は、模擬授業と同時並行的に授業観察の訓練を行うことにより、その問題解決を図ろうとしている点である。また、わが国の教師教育や教員養成の研究では、メンタリングやコーチングの手法の開発など、ファシリテーターの直接的な支援の内容や方法の質を問うアプローチは既に多くの議論がなされているが、教員チームや個人の自律的な学習を支える学習開発を追求するアプローチは比較的手薄である。本研究の意義の2つ目は、後者のアプローチで教育実践力を高める方法を議論している点である。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop a pre-teaching training program for an observation team to share records and discussions while observing classes to confirm their growth in lesson study. Our efforts yielded two points of practical theory. First, even if the team members are diverse, this does not prevent the recording of actions and sharing of interpretations, but the involvement of a supervisor is not necessarily effective in improving observation skills. Second, even if classes are conducted online, it is possible to attend to the learning state of each learner by visualizing their thoughts.

研究分野：教員養成

キーワード：授業研究 教員養成 授業分析 授業観察 協働学習

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「教育実習生の授業観察力を高めるために、どのような支援が必要か」という問いを中核に据える。とくに、事前指導における学生の多角的な授業記録の即時的共有に基づく授業研究トレーニングとそれによる実習中ならびに実習後の学習への影響に着目する。

2006年に中教審答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」が公開されたことを契機に、教員養成プログラムでは「実践的指導力」の育成に重きが置かれるようになり、教育実習とその事前事後指導の役割は益々重要なものとなった。しかしながら、近年の教育実習に関する諸報告の中では、例えば実習中に観察した授業等から「指導観」と「生徒観」のつながりを考察するレベルにまでは至っていないという報告もみられる(三山 2011)。教育実習中に観察対象となる授業の設計の根底にある指導観、生徒観、教材観を推測しながら授業を観察し、実態を解釈することは、実習生自身の授業設計を質的に改良するための手がかりとなるため極めて重要である。

我が国では、このような高度な観察技術を高めるために、ビデオ記録を用いた省察や、グループ協議による多角的な授業研究の方法が開発されてきた(平山 2013, 生田 1998, 三島 2013)。しかしながら、とりわけ教員養成大学以外の教育実習事前指導において、これらの方法が十分活用されているかという点、必ずしもそうとはいえない。とくに事前学習において観察の訓練のための時間の確保が困難であるということや、「主体的・対話的で深い学び」のように今後求められる授業を対象として行うことを想定された方法とはいえないためである。

三山 緑 (2011) 教育実習生の授業をとらえる視点の変容に関する分析 -平成 21 年度 A 大学教育実習生を対象として-。岐阜聖徳学園大学紀要。教育学部編 50, pp.117-130.
 生田 孝至 (1998) 授業を展開する力。浅田 匡, 生田 孝至, 藤岡 完治(編著) 成長する教師。金子書房, 東京 pp.42-54
 平山 勉, 後藤 明史, 竹内 英人 (2011) ユビキタス映像記録視聴システムを活用した授業能力育成支援の試み。日本教育工学会研究報告集 2011(1), pp.9-16
 三島 知剛 (2013) グループディスカッションとモデリングによる教職志望学生の授業観察力の育成。教育心理学研究 61(3), pp.277-289

2. 研究の目的

以上の問題を解消する方法として、申請者は複数人数間で予め異なる観察視点を分担する観察チームをつくり、それぞれがスマートフォンを用いて様々な角度から捉えたお互いの授業認知情報を共有し、観察と研究協議を同時進行で行うという授業研究方法を試行した(図 1)。

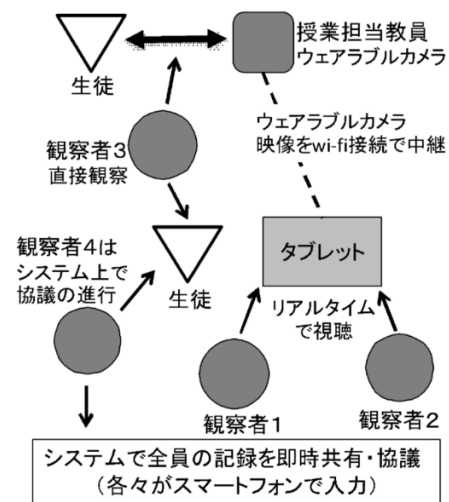


図 1 授業観察チームの即時的協議

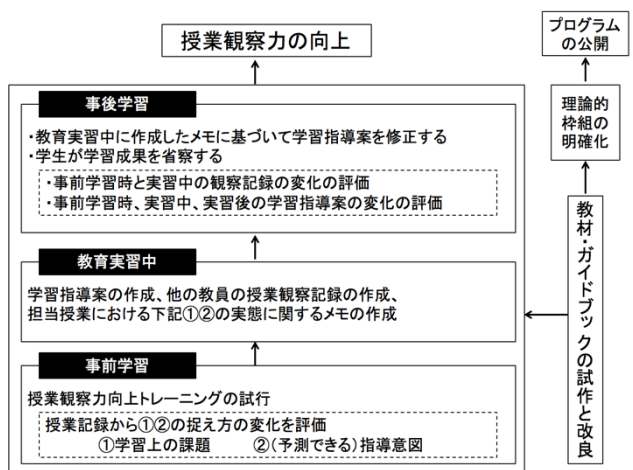


図 2 プログラムの概要

なお、観察した授業は多様な活動がみられ、定点カメラでの記録が困難であった。観察者は学部生、修士課程の院生、教職大学院の院生といずれも教育実習を既に経験したことがある学生であった。その結果、観察中に生徒の学習上の課題や授業担当教員の指導意図に関する解釈の変化が確認できた。教育実習前の学生に対しても同様の方法を援用することによって、授業中に生じている学習上の課題および授業担当者の設計・指導上の意図を究明する学習態度に結びつけることができるようになり、短期間の教育実習をより充実したものにする事ができるのではなかいかと考える。

以上のことから、本研究ではとくに、教員養成大学以外の教職課程でも実施可能な、教育実習

生を対象としたチーム型授業観察力養成プログラムの開発と、教材や学習手順を示したガイドブックの開発を目的とする（図2）。これにより、学生に下記の変容が期待できる。

- ・事前指導において、生徒の学習上の課題を捉え、授業担当教員の指導意図を推測するための観察の視点を獲得し、常に別の角度から解釈を再検討できるようになる。
- ・実習簿の記録で学習上の課題と指導意図を明確に書き取ることができるようになる。
- ・学習上の課題と指導意図について、自身が担当する授業の指導案においても予測を示し、事後に結果を追記することができるようになる。
- ・授業後もしくは事後指導の際に、指導案上に示した予測と結果を手がかりとして具体的な改良案を示すことができるようになる。

以上のことから、本研究で授業観察力の向上に重きをおいた教育実習事前事後指導のプログラムを開発することにより、実践的指導力の育成に寄与できると考える。また、教育実習事前指導の中で模擬授業を行う場合の効果の促進や効率化を目指し、限られた時間の中で模擬授業の実施と授業観察と研究協議を同時並行させようとする点が特徴的である。

3. 研究の方法

【1年目】 教育実習生を対象とした授業観察力養成プログラムを試行し、プログラムの改良点を明らかにする。

- [a] 分析1：プログラムを試作・試行し、学生へのアンケート調査により、システムの使用感やプログラムの満足感を調査する。
- [b] 分析2：システムに投稿された内容を質的に分析し、観察者が授業担当者役の指導意図や、生徒役の学習上の課題を推測できるようになっているかを調査する。
- [c] 分析3：学習指導案について、授業前に作成したもの、授業中に作成したもの、実習中に作成したもの、実習後に修正したものを比較して、記述の違いからどのような変化が確認できるかを質的に分析する。
- [d] 学校教育での教師教育者からの評価によって、プログラムの妥当性を確認する。
(支出予定：分析ソフト、データ整理アルバイト、専門的知識への謝金など)

【2年目】 プログラムを改良し、正式なガイドブックを開発・公開し、改良したプログラムの妥当性を検証し、さらに補強を要する点を明らかにする。

- [e] 改良したプログラムを、申請者自身が担当する授業や他大学等で試行する。その結果を踏まえ、受講生によって運用方法をアレンジする必要がある部分と、汎用性の高い部分を明らかにし、公開用のガイドブック（他大学でも実施できるよう教材と手順をまとめたもの）に明記できるようにする（そして、さらに協力者を募る）。
(支出予定：システム改修費、専門的知識への謝金、ガイドブック製本費など)

【3年目】 プログラムを継続しつつ、成果物を普及するために、本研究で得た知見の理論的枠組みを明らかにする。

- [f] 本プログラムによって導くことができる観察者の学習成果について得られた知見を、歴史的に、あるいは国内・国際的な視野から評価するために、関連する文献を精査して本研究を位置づけるとともに、研究の理論的枠組みを明確にする。
(支出予定：図書購入費、専門的知識への謝金、論文印刷代など)

表1 研究のスケジュール

	平成31年度【1年目】				平成32年度【2年目】				平成33年度【3年目】			
月	4-6	7-9	10-12	1-3	4-6	7-9	10-12	1-3	4-6	7-9	10-12	1-3
[a]	試行・分析1											
[b]		分析2										
[c]		分析3										
[d]			評価・改良									
[e]					試行・分析		改良					
									プログラムの実施			
[f]	文献・情報収集								理論化			

4. 研究成果

(1) 平成31年度・令和1年度（2019年度）の成果

2019年度は、主につぎの3つのことを行った。

1つ目は、代表者が担当する教育実習関係科目における事前指導の限られた時間の中において、

模擬授業の実施と並行しながら授業観察の訓練を試行することである。訓練内容として、模擬授業で授業を行う学生以外を生徒役チームと観察チームに分け、さらに観察チームメンバーそれぞれが異なる観察視点を担当しながらリアルタイムで観察記録を共有するとともに、研究協議を行うことを計画し、試行した。2つ目の取り組みは、昨年度まで取り組んできた、教職大学院生を中心として構成した複数の観察チームによるチーム型授業観察の実践から得ることができたことを改めて整理して、学会において専門家と意見交換を行うことである。3つ目は、2つ目に得られた知見が異なる対象（教育実習を経験した学部生および教育実習を経験する前の学部生で構成された複数チームでの観察）でも適用可能かを検証することである。

これらの取り組みを通して明らかになったことは、つぎの2点である。

まず、授業において認知したことを素材として他者と協議し、解釈の質的向上を図るためには、目の前で起きていることをあるがままに捉えるとともに、それらに対して問いを抱き、言語化する技術が重要であることがわかった。しかしながら一方で、授業観察の経験を重ねてきた教職経験者（例えば教育実習関係科目を担当する大学教員等）が、協議の活性化を促すファシリテーターとして直接的に観察チームの協議に関与することが、観察技術の向上に必ずしも有効だとは言えないということも明らかになった（表2）。

表2 2チーム間のファシリテーターの影響の比較

	Aチーム		Bチーム	
	実数	割合	実数	割合
観察者1	24	14.72	11	23.40
観察者2	35	21.47		
観察者3	31	19.02	9	19.15
観察者4	25	15.34	9	19.15
ファシリテーター	48	29.45	18	38.30
1人あたり平均	32.6		11.75	
協議数	11		4	
ファシリテーターが関与した協議	5	45.45	4	100
1協議あたりの平均投稿数	4.45		3.25	

Aチームの協議はBチームよりもファシリテーターの介入率が低い、一人ひとりの発言数や協議の数が多く、一つの話題で共有した情報数も多い → ファシリテーターの協議の介入率と協議の自律性の因果関係は低い？

（2）令和2年度（2020年度）の成果

2020年度(4月から3月末)は休暇手続きを取って研究を中断し、研究期間の延長手続きをとった(2021年度より再開)。

（3）令和3年度（2021年度）の成果

2021年度は主につぎの3つのことを行った。

1つ目は、2019年度に実施した試行(教育実習経験者と未経験者で構成された複数チームで中学校の授業を観察し、記録共有システムで授業研究を行う)から得ることができたことを改めて整理して、学会において専門家と意見交換を行うことである。2つ目は、2019年度に引き続き、代表者が担当する教育実習関係科目における事前指導の限られた時間の中において、模擬授業の実施と並行しながら授業観察の訓練を試行することである。このときも2019年度と同様に、複数の観察者が模擬授業を観察しながら授業の記録をとり、授業記録共有システムを用いて記録を共有し、協議した。ただし、2021年度は新型コロナウイルス感染対策のため、zoomを用いて模擬授業を行った。3つ目は、上記の実践における課題点を踏まえて、オンライン模擬授業におけるチーム型授業研究を企画し、有志の学生の協力を得て試行した。今後は非対面型の学習を設計・運用する経験や、それを前提としたチーム型授業研究を行う必要性を感じて行った。

これらの取り組みを通して明らかになったことは、つぎの2点である。

まず、学習経験や属性が多様な組み合わせであったとしても、授業記録の共有や授業の解釈を妨げることはない、ということである。むしろ、学習経験や技能や専門性の違いをうまく活かすことができるような学習環境を設定することによって、授業の解釈の視点の持ち方や記録のとり方などに関する学習が促される可能性が示唆される（表3、図3）。

2つ目は、観察対象となる授業もしくは模擬授業を設計する際に、学習者一人ひとりの思考を可視化するしくみ(例えばICTを用いて一人ひとりが考えを表現するなど)を採用することによって、その授業もしくは模擬授業がオンラインで実施されたとしても授業を観察しながらチームで協議を行うことが可能であることがわかった。

表3 学年の異なる学生の発言量の比較

一概に言えない

学習経験の違いは発言量に影響を与えるのか？
(例：後輩は発言しにくい?)

チーム	1日目 (2019/11/12)		2日目 (2019/11/19)	
	1	2	1	2
A (2年, 技術科)		生徒 37	進行 8	
B (3年, 理科)		教員 27	進行 50	
C (3年, 理科)	生徒 14		教員 27	
D (3年, 理科)	進行 8		生徒 14	
E (4年, 理科)	教員 32		生徒 15	
F (4年, 理科)		進行 30	教員 33	

※生徒：生徒観察, 教員：教員観察, 進行：協議進行

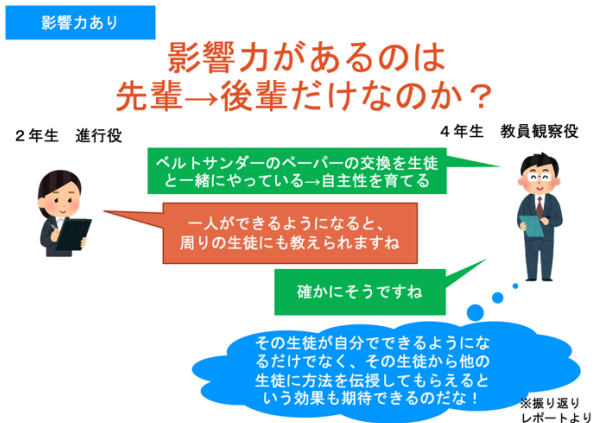


図3 学年の異なる者同士の観察での気づきの影響

(4) 令和4年度(2022年度)の成果

2021年度に、新型コロナウイルス感染症対策のため、教育実習関連科目における模擬授業とその観察をZoomで行ったが、今後は非対面型の学習を設計・運用する経験や、それを前提としたチーム型授業研究を行う必要性を感じたため、オンライン模擬授業におけるチーム型授業研究を企画し、有志の学生の協力を得て施行した。2022年度は、このときに明らかになったことを整理して、学会において専門家と意見交換を行った。

その際、報告したことは次の内容である。観察対象となる授業もしくは模擬授業を設計する際に、学習者一人ひとりの思考を可視化するしくみ(例えばICTを用いて一人ひとりが考えを表現・共有できるようにするなど)を採用することによって、その授業もしくは模擬授業がオンラインで実施されたとしても、観察者も学習者の思考過程に注意を払いながら観察チームで協議を行うことが可能である、ということである(図4)。

これまでの報告も含め、その他の専門家からは、本研究で提案する授業研究の方法に対して、適応可能な教科や題材等に限られるのではないかという指摘がなされた。このことから、今後の課題として、本研究が目指す授業研究を含め、それ以外の多様な授業研究の方法を、教科や授業方法、授業研究の目的等に注目しながら整理し、本研究の位置づけを改めて行いたい。

観察中の認知

認知と解釈の対象	具体的な記録例	確認できた実施回(枚数)
生徒の変容	授業前後で生徒の李徴へのイメージの変化	2(3),3(1)
学習上のつまずき	生徒オセアニア州間違える	1(3),2(1),3(2)
到達状況の解釈	Bがまだ解けていない	2(1),3(1)
意図的な指導	質問時間を設けている	1(5),2(3),3(1)
指導の意図	回答のハードルを下げている	1(8),2(1),3(1)

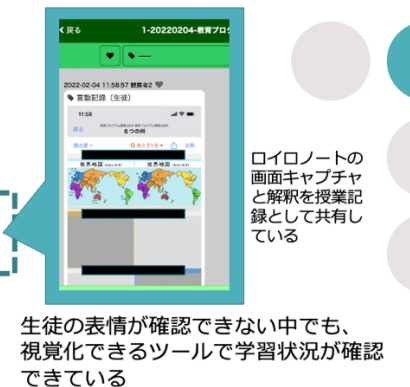


図4 カメラオフの状態での状況理解(認知と解釈)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 古田紫帆
2. 発表標題 オンライン模擬授業の訓練におけるチーム型授業研究の試行
3. 学会等名 日本教育情報学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 寺嶋浩介, 山本良太, 石橋純一郎, 三井一希, 稲木健太郎, 古田紫帆
2. 発表標題 シンポジウム「GIGAスクール構想の実践的展開に見る教育現場と研究者のパートナーシップ」
3. 学会等名 日本教育工学会2022年秋季大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古田紫帆
2. 発表標題 学生チームによる授業観察プログラムにおける授業解釈の変化
3. 学会等名 日本教育情報学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古田紫帆
2. 発表標題 認知の変化を促すチーム型授業研究における協議の比較
3. 学会等名 日本教育工学会2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古田 紫帆 , 古田 壮宏 , 吉川 裕之
2. 発表標題 チームによる授業観察の質的向上に関する考察
3. 学会等名 日本教育工学会研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関